

【登場人物表】

横川のどか(200)大学生・メガネっ子

央地俊哉(200)のどかの元同級生

清田せいな(200)のどかの元同級生

松尾ゆかり(200)央地の大学同期

小林悠一(200)のどかの元同級生

加藤勝(177)高校生

田中耕太(177)高校生

鈴木圭司(177)高校生

松本(177)のどかの元同級生

遠野(177)のどかの元同級生

○横川家・のどかの部屋（朝）

シンプルな部屋。

全体が白で統一されている。

ベッドの上、横川のどか（20）が

寝ている。

うなされているようで顔をしかめて

いる。

○（夢）六花高校・廊下

制服に身を包み、おさげに眼鏡をか

けていかにも地味な雰囲気なのどか

が立っている。

制服姿の央地俊哉（17）が近付い

てきて後ろからおさげを引っ張る。

のどか「ぎゃっ」

央地「なー、なんでいつもおさげ？しずか

ちゃんみたいじゃね？たまには色んな髪

型とかしろよな。清田とか毎日髪型違う

じゃん？」

のどか「なんでもいいやろ！これが一番楽

なだけや！ほっといてよダラブチ！」

央地 「あはは、また言われちゃったダラブチ」

央地、鼻歌を歌いながら去っていく。

のどか、髪を撫でながら悔しそうに

央地を睨みつける。

小林悠一（ヘン）がのどかの肩を軽

く叩く。

小林 「央地のバカにまたからかわれてただ

ろ。大丈夫か？」

のどか、ぎこちなくうなずく。

小林 「そっか。まあ横川さんは嫌なこと八

ツキリ言える人だから安心かな」

小林、笑ってのどかの頭をポンと叩く。

のどか、真っ赤になってうつむく。

のどか 「あ、あの：小林くん、私」

のどか、顔を上げる。

のどか、教室の隅に立っている。

中心には小林と央地、松本（エフ）、

遠野（エフ）。

央地 「なあ横川っているじゃん？」

松本 「あー。お前がよくからかってるあの

子？」

央地 「この間横川が佐藤さんと話してるの

聞こえちゃったんだけどさ、あの子お前

のこと好きらしいぜ？」

のどか、顔をひきつらせる。

のどかの声 「なんで知ってるの？なんで言

っちゃうの？」

松本と遠野、口笛を吹いて盛り上がる。
る。

小林 「え、俺？」

遠野 「おーさすが色男モテるねー」

松本 「どうする付き合っちゃう？」

央地 「お前はと思う？あの子のこと」

小林、顔をしかめる。

小林 「冗談だろ誰があんな女と！」

のどか、目を見開く。

遠野 「あ、好みじゃない？」

小林 「ないない。あんな地味な上に気が強い女なんてパス！」

小林、大げさに吐くふりをする。

小林 「お前、何回あいつにダラブチ！って言われたと思ってるんだ、なんだよダラブチって！キモッ」

松本と遠野、爆笑する。

のどか、耳を塞いでしゃがみ込む。

小林 「央地もそう思うだろ？お前ももしかゅうダラブチって言い返されてたじゃん？」

央地 「まあ：言われてんなあ」

央地、苦笑。

男子たちの笑い声が響いている。

のどか 「いや、聞きたくない：！」

笑い声に重なってスマホのアラームが鳴り響く。

○（もとの）横川家・のどかの部屋（朝）
ベッド脇のスマホが鳴り響いている。
のどか、暗い表情で目を覚ます。
緩慢な動作でスマホを止めて起き上
がる。

のどか「目覚め最悪」
のどか、ボサボサの頭を搔く。

○白尾駅・ホーム（朝）
通勤・通学客でごった返している。
薄いピンクのワンピース、眼鏡にお
さげののどか、暗い顔で電車を待つ。
背後で加藤勝（ハル）・田中耕太
（ハル）、鈴木圭司（ハル）が騒い
でいる。

のどか、チラッと見て溜息。
のどか「朝から元気ね」
ホームに電車が入ってくる。
電車に乗り込むのどか。

○電車の中（朝）

スマホで乙女ゲームをプレイするの
どか。

イケメンが甘い台詞を囁いている。

爽やかなイケメンの台詞

「朝から元気だな！」

君の笑顔を見るだけで俺も元気にな
れたよ」

ちよつとにやけながらスマホを見て

いるのどか。

加藤 「だってアレはないだろー！」

加藤 がのどかにぶつかってくる。

よろけてスマホを取り落とすのどか。

加藤 「あ、すみません」

加藤、のどかを見ないまま田中・鈴
木の方へ向いて話し続ける。

のどか、不満げに加藤を見るが何も
言えずスマホを拾う。

田中 「でも長田は絶対Dはあるって。あの
デカさ間違いない」

加藤 「いや胸ばっかデカくてもさあやっぱ
顔は大事だろ」

鈴木 「あーあいつ顔は甘く見ても〆〇点て
トコだしな」

のどか、チラリと加藤たちを見る。

加藤 「マジ？鈴木あいつにそんな高い点数
つけんの？嘘だろ㇗〇点じゃん？」

鈴木 「お前どんだけ採点厳しいんだよ」

田中 「じゃあさ、鈴木お前長田とやれる？

〆〇点だしDカップだし」

のどかの手が震えてゲームが進まな
くなる。

鈴木 「いや俺は尻派なんで」

加藤 「尻だったら後藤はでけーんじゃね？」

田中 「あいつのはただのデブじゃん！」

加藤達、大爆笑。

のどか、立ち上がって加藤達の方を
向く。

のどか 「あんた達！」

のどかの大声に車両内にいた人全員

が振り返る。

奥に座っていた央地（20）が顔を上げる。

加藤達、のどかを振り返る。

田中 「な…なんすか」

のどか 「さつきから聞いてりゃ朝っぱらからゲスい話を大声で…ここがどこかわかっとらんのか…公共の場所やぞ！恥ずかしいと思わんのか！おまけに女のこと何やと思うとるんじゃ！〇点だの△点だの…そんなくだらんこと言っとるあんた達は〇点じゃだらぶち！」

ポカンと聞いている加藤達。

央地、笑顔で見ている。

のどか、肩を怒らせて加藤達を睨む。
電車が駅に着き、ドアが開く。

アナウンス 「小島、小島です。お出口は左

側…」

加藤 「なんか…すみませんでした…」

加藤達、そそくさと降りていく。

のどか、鼻を鳴らしゆっくりと電車を降りる。

○小島駅・ホーム（朝）

続々と降りていく乗客たち。

のどか、電車から降りて早足で歩いていく。

央地、降りてきて駆け足でのどかを追いかける。

央地「あの！ねえ！」

のどか、振り返る。

央地、笑顔で駆け寄り。

訝し気なのどか。

央地「横川さん…だよ。六花高校で一緒だった」

のどか、ジッと央地を見る。

央地「わかんないかな…俺、央地。央地俊

哉。同級生だったろ」

央地、満面の笑みを向ける。

のどか「あ…央地、くん」

央地 「思い出した？ いやあ久しぶり…」

央地 、握手しようとして手を伸ばす。

のどか、サツと後ずさる。

央地 「え」

のどか、強張った顔で央地を見る。

のどか 「…なんの用ですか」

央地 「いや、さつき電車で見かけてさ。ア

レ見て懐かしいなあって思って」

のどか 「懐かしいってなんですか。私をか

らかったたこと思い出したって？」

央地 「いや、そういうわけじゃ…」

のどか、険しい表情で見ている。

央地 「さつき、電車で高校生にお説教して

たじゃん？ ダラブチ！ って。俺もよく怒

られたなって思い出して」

央地、照れ臭そうに笑う。

央地 「普段結構オドオドしてるのにさ、い

ざ怒ったら強いんだもんな。そういうと

こ変わってないなって思ってさ」

央地、のどかを見る。

央地「好きだなんて」

のどか、目を見開く。

央地「あ、数年ぶりに会っていきなりこんなこと言われたら驚くと思うけど」

のどか、央地を思い切りビンタする。

通りかかる人々が驚いて見ている。

通行人「なにあれ修羅場？」

通行人「朝からやるう」

央地、頬を抑えてのどかを見る。

のどか、真っ赤な顔で央地を睨む。

のどか「どの面下げて言えるん」

のどか、踵を返し立ち去る。

央地「あ、待って！連絡先……」

央地、慌てて追いかける。

通行人に阻まれて近づけない。

のどかの背中が遠くなっていく。

○小島大学・講義室（朝）

学生が騒いでいる。

ドアが乱暴に開き、学生が驚いて振

り返る。

鬼の形相ののどかが立っている。

大股で入ってきて最後列真ん中の席に座りスマホで乙女ゲームを始める。

途端に表情が緩む。

のどかをチラチラと見る学生たち。

のどかのスマホにはワイルドな見た

目のイケメン。

イケメンの台詞

「そんなにか弱い見た目なのに：結構強い女だな、お前って。嫌いじゃないぜ」

イケメンに央地の顔が重なる。

のどかの表情が険しくなる。

机を思い切り叩いて叫ぶ。

のどか「なあにが好きだな、じゃ！人を馬

鹿にするんも大概にしるや！」

学生の視線が一気に集中する。

のどか、周囲を見回して我に振り返り下を向く。

学生たち、それぞれの世界に戻っていく。

のどか、スマホをギュッと握る。

のどか「ホント：今日は最悪」

のどか、目を閉じる。

講義室に教授が入ってくる。

教授「はい席に着いてください」

慌てて席に戻る学生たち。

教授が講義を始める。

○小島駅・全景（夕）

○同・駅舎前（夕）

のどかがスマホを見ながら歩いてくる。

タクシーが停まり中から派手な身形

の清田せいな（20）が降りてくる。

せいな「（運転手に）どうも！」

歩き出したせいなのどかがぶつかる。

のどか・せいな「わっ」

のどかのスマホが落ちる。

のどか「ご、ごめんなさい」

せいな「こちらこそ…」

せいな、スマホを拾ったのどかに差し出す。

のどか「ありがとう…」

のどか、受け取ろうと手を伸ばす。

せいな「あれっ横川さん？」

のどか「え？」

のどか、せいな顔を見る。

せいな、笑顔。

せいな「私、私。清田せいな。覚えてない

？あーわかんないかな、私結構変わったちゃったし？こっちはすぐにわかったけど」

のどか、せいなを凝視する。

のどか「清田…（わかった）ああ」

せいな「横川さんもこの駅使ってたんだ？

なに？大学だったけ？」

せいな、のどかを促して一緒に歩き出す。

のどか「はい、小島大。清田さんは？」

せいな「私はあっちの武蔵美容短大。今まで会わなかったの不思議だね。元気してた？」

のどか「ええ、まあ」

パスケースを取り出して改札に向かうのどかとせいな。

改札手前、壁にもたれて央地が立っている。

のどかに気付き、安堵の表情で体を起こす。

央地「横川さん」

のどか、央地に気付き顔を強張らせて立ち止まる。

のどか「げっ」

せいな「なに？」

せいな、央地を見る。

せいな「央地？なんでアンタこんなところにいんの。あんたの大学この駅じゃないっしょ」

央地、のどかの前に立ち、頭を下げる。

央地 「今朝のこと、ゴメン。昔のこと考えたら君が怒るのも当然だ」

のどか、少し後ずさる。

せいな 「なになに、あんた横川さんにまた

何かしたわけ？あんた高校から何も変わってないね」

央地 「うるさいな清田！お前は関係ないだろ何だよ急に湧いて出て」

せいな 「そこで会ったの！ねー横川さん」

のどか 「うん」

央地 「とにかく。横川さん」

のどか 「は、はい」

央地 「今朝のこと、驚かせたのは悪かったと思う。でも、俺本気なんだ。あの頃は気になる君を怒らせて構ってほしいとか思うようなガキだったけど、今は違うんだ」

央地、のどかの手を取る。

のどか、小さく悲鳴を上げる。

央地 「横川のどかさん。君のこと、高校か

らずっと好きだった。朝再会して、まだその気持ちが変わってないって自覚した。俺と付き合ってください」

のどか、パニック。

せいな、央地の手を払って間に入る。

せいな「ちよつとちよつと！」

のどか、せいなに隠れる。

央地「清田！何すんだよ」

せいな「情熱的なのもいいけどねえ、あん

たは過去の所業をもっと反省すべきよ。

横川さん、あんたにビビってんのわかん

ない？」

央地、のどかを困ったように見る。

央地「横川さん」

のどか「ごめんなさい」

せいな「だよねえ。わかるよ」

央地、目を伏せる。

せいな、のどかを振り返る。

せいな「でも、さっきの央地の言葉に嘘はなさそうだったのが私の印象。だから」

せいな、のどかと央地を向き合わせる。

せいな「まずはLINEでも交換して、お友達からやり直しましょう」

のどか・央地「は？」

せいな、スマホを取り出して笑顔。

せいな「私とも交換しよ！ね？」

のどかと央地、せいなに苦笑い。

○横川家・のどかの部屋（夜）

ベッドに座りスマホを見るのどか。

LINEの友達画面。

せいなと央地が入っている。

のどか「結局交換してしまった！」

のどか、央地の名前をタップする。

央地の笑顔のアイコンと背景に央地

と小林を含めた数人の集合写真が出る。

のどか、眉間に皺を寄せてホーム画面に戻る。

央地からLINEが来る。

驚くのどか。

のどか「わ、来た！」

央地のLINE

「今何してる？」

「飯めっちゃ食べて苦しー」

「明日の講義何時から？」

「朝会えたら嬉しい」

喜んでいるキャラのスタンプ。

のどか「なに、めっちゃ来るんだけど…」

央地のLINE

「暇な時間でいいから返事があると嬉

しい」

「無理は言わないけど」

「待ってる」

のどか、無言でスマホを眺める。

LINEが来る音が続く。

○白尾駅・ホーム（朝）

のどかがスマホ片手に歩いてくる。

せいなとのLINEのトーク画面を
開いている。

せいな
のLINE

「明日一緒に行きよう！9時に白尾集
合ね！」

のどか「どのへんかな」

のどか、辺りを見回す。

駅舎の陰、せいなが背を向けて立っ
ている。

のどか、せいなを見つけて近付いて
いく。

せいな、央地と話している。

のどか、足を止める。

せいな「そんなに送ったの？あんたバカじ
ゃない」

央地「ちょっと舞い上がったままっつい…。

さすがにもうやらん、反省してる」

せいな「当り前だわ。ウザがられても当然
だし。それで？返信は？」

央地「ゼロ」

せいな「でしょうね」

央地「はあ…マジで昔の自分を呪うわ」

せいな「レスが無いのはそれだけが原因じゃないと思うけど、まあいいわ。央地が横川さんに本気の本気だって言うなら、私も協力してあげるけど？」

央地「いや、それはいい。誰かの手を借りるもんじゃないから、こういうのは」

のどか、目を見開きスマホを握り締める。

せいな「ほほ〜かなり本気ってこと。わか

った。手は出さないよ」

央地「悪いな」

せいな「いいよ〜」

せいな、ふと振り返りのどかに気付く。

せいな「あ、横川さん、おはよ」

のどか、慌てて笑顔を作る。

のどか「お、おはよう」

央地、陰から出てくる。

央地 「おはよう横川さん！」

のどか、顔がひきつる。

のどか 「お：おはよう：」

せいな 「ごめん、央地も一緒にでもいい？」

のどか 「う、うん」

央地、笑顔を見せる。

○車内

のどか、せいな、央地の順で並んで

立っている。

せいな 「そーいや皆どうしてんの？昔つる

んでた皆」

央地 「松本は就職して、遠野は関東の大学

行ってる。時々LINEするくらいだな」

せいな 「あいつは？小林。確かあんたと同

じトコ受けてなかったっけ」

のどか、うつむく。

央地 「ああ：」

央地、のどかをチラリと見る。

央地 「まあまあ遊んでる、かな」

せいな「そうなんだ。あー懐かしいな、同窓会でもやんないかなあ」

央地「卒業から時間経ってないだろ」

せいな「でも一年は経ったよ？」

せいながしゃべっているがのどかは

うつむいたまま。

央地、のどかを横目で見つつ話している。

○小島駅・ホーム

電車が入ってくる。

乗客が続々と降りてくる。

せいな、のどかの順で降りる。

央地の声「横川さん！」

のどか、立ち止まり振り返る。

○車内

央地、立ち上がったのどかに微笑む。

央地「また、LINEしてもいいかな」

電車の外、のどかが央地をチラリと

見て目を逸らす。

のどか「適度な回数なら」

のどか、会釈して去っていく。

央地、笑顔で見送る。

○東山大学・全景

○同・構内

小林、松尾ゆかり（NO）が立ち話
している。

ゆかり、ハッと気付いて笑顔で手を
振る。

ゆかり「おはよー俊哉！」

小林「今日は遅刻しなかったな」

央地、手を振り返し歩いてくる。

小林とゆかりの前に着くとゆかりが
抱き着いてくる。

央地「なんだよくつつくなよ」

ゆかり「いいじゃん、ちよっとくらい」

央地「もう彼女じゃないだろ」

ゆかり「いいじゃん、今は一人でしょ」

央地「一人じゃなくなりたいんだけどな」

央地、歩き出す。

小林「なんだよ好きな子でもできたんか」

小林とゆかり、続いて歩き出す。

ゆかり、不満そうな表情。

央地「まあな」

小林「どんな子？可愛い？スタイルいい？」

ゆかり「アタシより可愛い？」

央地「ノーコメント」

小林「なんだよつれねえな。協力するぞ？」

央地「お前じゃ協力にならない」

小林「わかんねえじゃん」

央地「わかる。お前には絶対教えてやんな

い」

小林「はあ？」

央地、スタスタと歩いていく。

小林とゆかり、不思議そうに顔を見

合わせる。

央地、急に戻ってくる。

央地 「ゆかり。ちょっと相談に乗ってほしいんだけど」

ゆかり、驚きつつうなずく。

○小島大学・講義室

学生が騒いでいる。

ドアが開いてのどかが入ってくる。

ドア付近の学生AとB、のどかの登場に身構える。

のどか、笑顔で最後列の真ん中に座りスマホを取り出す。

学生A「（小声で）今日は機嫌いいんだなのどか、スマホで乙女ゲームを始める。ワイルドなイケメンの真顔。

イケメンの台詞

「オレ、こんな見た目だしふざけているように見えるかもしれないけど。お前のことを想うこの気持ちだけは本物だから」

のどか、スマホを見てニヤニヤと笑

い出す。

のどか「ふふっ…」

学生 A と B、のどかを見てヒソヒソと話している。

のどか、にやけたままスマホを見ている。

いきなりバイブが鳴り、画面に央地からのLINEの通知。

のどか、真顔になり通知をタップする。

央地からのLINE

「横川さんと一緒に行きたいカフェがあるんだ。良かったら今度、どうかな？」

のどか、ちよっと笑みを作ってタップする。

のどかの返信

「暇なのでいいですよ」
すぐに既読になる。

央地からの返信

「え」

「マジで？」

「やったあ！」

喜ぶスタンプ。

のどか、笑いを堪えきれない。

教授の声 「あー、そこ。横川くん。横川くん」

のどか 「は、はい！？」

のどか、驚いて顔を上げる。

教授が教壇に立っている。

学生一同が振り返って見ている。

のどか、辺りを見回して苦笑い。

教授 「あなたはマルチタスクができるタイ

プなのかもしれませんが、スマホを見な

がらという姿は感心しませんね」

のどか 「は、はいすみません」

のどか、スマホを机に置いてペンを取る。

学生たちからヒソヒソと笑い声が漏れる。

央地からのLINEが来る。
のどか、スマホを伏せる。

○カフェ「三日月」・全景

こじんまりとした、緑に覆われた
建物で昔ながらの喫茶店の雰囲気。
央地とのどかが歩いてくる。

央地「ここなんだ」

のどか「素敵ですね」

央地、ドアに駆け寄り開ける。

央地「どうぞ」

のどか「あ、ありがとう…」

のどか、恐縮しながら入店する。

○同・店内

少し薄暗く、落ち着いた音楽が流
れている。

客はそこそこ入っていて、皆食
事したり談笑したりしている。

央地、窓際の席に近づく。

片方の椅子を引く。

央地 「横川さん」

のどか 「そういうのいいです」

のどか、央地と反対の椅子に座る。

央地 「そうか…」

央地、不満そうに椅子に座る。

マスターが近付いてくる。

マスター 「ご注文は」

央地 「ホットコーヒー一つ。あと…」

央地、メニューを開いてのどかに差し出す。

のどか、メニューを覗き込む。

央地 「このアップルパイがめっちゃくちゃ

美味しいんだって」

のどか 「へえ」

央地 「食べようよ。ごちそうするよ」

のどか 「えっ」

央地 「(マスターに)アップルパイ一つ」

マスター 「はい。以上でよろしいですか」

のどか 「あ、えっとアイスマイルクティー」

マスター「かしこまりました」

マスター、一礼して去っていく。

× × ×

マスター「お待たせいたしました」

テーブルにアップルパイと飲み物が

置かれる。

のどか「いい香り」

央地「こりゃ噂通りだな」

央地、ナイフを取り切り始める。

うまく切れずに悪戦苦闘。

のどか「（小さくため息）貸してください」

のどか、ナイフを取り切り分けていく。

央地「ごめん…うまくできなくて」

のどか「パイはコツがいるんです」

のどかが切っていく様子を見つめて

いる央地。

のどか「どうぞ」

央地「いただきます」

央地、手を合わせて食べ始める。

のどか、ジッと見ている。

央地の声「うまつ！俺これ無限に食べれるかも！」

のどか、微笑んで央地を見ている。
ハッと気づいて真顔を作りミルクテイーを飲む。

○白尾駅・ホーム（夕）

電車がホームに入ってくる。

○車内（夕）

電車が止まり、扉が開く。

のどか、席を立ち扉に近づく。

のどか「それじゃ、私はこれで」

央地「あ、うん：また明日」

のどか、会釈して降りていく。

央地、にやけた顔で手を振る。

扉が閉まり、電車が走り出す。

○道（夕）

交差点、信号を待つのどか。

スマホを取り出す。

○車内（夕）

央地、着信がありスマホを手取る。

央地「え！？」

スマホを凝視して立ち上がる。

のどかからのLINE

「今日はありがとうございました。」

アップルパイ、美味しかったです」

央地「え、初めて来た！？マジ！？やった」

央地、大はしゃぎ。

周囲の乗客、不審げに見る。

○横川家・のどかの部屋（夜）

部屋着でスマホを見ているのどか。

スマホ画面は乙女ゲーム。

ワイルドなイケメンとデート中。

央地からのLINE通知が届く。

のどか、微笑む。

○白尾駅・駅舎前（朝）

のどかが立っている。

央地、せいなが近付いてくる。

互いに挨拶しながら入っていく。

○同・ホーム（朝）

央地、せいな、のどかの順で横に並び電車を待っている。

せいな、スマホを見ている。

せいな「そうそう、昨日昔の話してたら懐かしくなっちゃってさ、久しぶりに真美

と連絡とっちゃった。小林の元カノだっ

た子」

央地「ああ、そんな子いたな」

のどかもせいなを見てうなづく。

せいな「クロスランドに皆で行ったことあ

ったでしょ？あの時の話も出てさ」

のどか「クロスランド？」

せいな「そう。行ったでしょ？文化祭の打

ち上げで。（央地に）ねえ？」

央地、うなづく。

のどか「あー…私、その時行ってません」

せいな「え、なんで？」

のどか「前の日の晩に熱出しちゃって寝込

んでたんです」

せいな「えーそうだったんだ。じゃああの

時松本くんがジェットコースターの後フ

ラフラしながら着ぐるみに体当たりしち

やったのとか、彩香がゲーセンでぬいぐ

るみ大量ゲットしたのとか、知らないん

だ？」

のどか「はい。次の日友達に話を聞いてホ

ント悔しかったの思い出しました」

せいな「だよなーマジで皆盛り上がったた

もん」

のどか「うらやましいなあ、青春！って感

じの思い出ですよね」

央地「だったらさ！」

せいなとのどか、目を丸くして央地

を見る。

央地 「行こうよ、クロスランド」
のどか 「えっ」

戸惑うのどか。

せいな、隣でニヤニヤとのどかを見
ている。

○東山大学・カフェスペース

小林とゆかり、他に数名の学生が集
まって談笑している。

央地が両手にコーヒーを持ちやって
来る。

小林 「よお」

央地 「おう」

小林とゆかりの間に座る央地。

央地、片方のコーヒーをゆかりに差
し出す。

央地 「ほい。限定のやつ。飲みたがってた
だろ」

ゆかり 「えっありがとう」

ゆかり、驚きながら受け取る。

小林 「なんだよ央地、俺にはないのかよ」

央地 「ねえよ、これはお礼なんだから」

小林 「お礼？」

小林、ゆかりを見る。

ゆかり、首を傾げる。

ゆかり 「ああ、もしかして昨日の相談のこと？え、昨日行ったの？あの後」

央地 「そうなんだよ、ダメもとで誘ってみたらOKもらえてさ！めっちゃ喜んでもらえたんだよ！サンキューな、ゆかり！やっぱり持つべきものは異性の友人だよな、女子のツボわかってるわ」

ゆかり、ぎこちなく笑う。

小林 「ふーん、なんか楽しそうじゃん？珍しいじゃん、そんな風に喜んでるの」

央地 「そうか？あ、そういや小林。高校生時にクラスでクロスランド行ったの覚えてるか？」

小林 「あー行ったなそういや。今思えばあんなしよっぱい遊園地でよくあんだけ盛

り上がれたよな」

ゆかり「高校で行ったの？」

小林「そう、クラスでな」

ゆかり「いいじゃん。クラスで行くとかい

かにもーって感じ。あたしのトコなんか

そんな空気なかったもん」

小林「うらやましいか」

ゆかり「うらやま。そしたら知ってる？あ

そこにちよっとした都市伝説あるの。し

かも女子が好きそうな奴」

央地「なにになに？」

ゆかり「男女でコーヒーカップに乗って五

十回転できたらその二人はくつつくって奴

小林「なんだよそれー五十回転するって鬼

じゃね？」

央地「五十回転もできるもんか？」

ゆかり「めっちゃ回せばできるかもね」

小林「達成する前に目回しそうだな」

ゆかり「だから都市伝説なんじゃん」

ゆかり、コーヒーを口に運ぶ。

央地 「いいこと聞いた〜」

小林 「え、央地 お前 チャレンジすんの？ 気になるアノコと？」

ゆかりの手が止まる。

央地 「やってみっかなあ…。実はデートに

誘って見たらOKもらえてさ」

小林 「マジで？ お前 やっぱり手早いな」

央地 「うるせ、まだ手は出してないわ」

小林 「ちゃんと付き合えたら紹介しろよ？」

央地 「どうするかなあ…」

小林 「なんだよそれ」

央地 「嘘嘘、お前にはちゃんと紹介するよ。

(ゆかりに) お前にもな」

ゆかり 「どっちでもいいよ」

ゆかり、立ち上がる。

小林 「あ？ もう時間か？ 早くね？」

ゆかり 「ちよっと教授に用事あるから先に
行くね」

ゆかり、振り返らずに去っていく。

央地と小林、意味が分からない。

小林 「なんだあいつ。怒ってね？」

央地 「言ってたコーヒーと違ってたかな」

央地と小林、首を傾げる。

○横川家・全景（夜）

のどかの部屋にライトが点いている。

せいなの声（電話） 「ちょっと意外だった
なあ」

○同・のどかの部屋（夜）

机の上にスマホが置かれスピーカー

状態で通話になっている。

部屋中に洋服やアクセサリーが散ら
ばっている。

のどかが鏡の前で洋服を選んでいる。

のどか 「どういう意味ですか？」

せいなの声 「央地のこと。デート受けるな
んて思わなかった」

○マンション・せいなの部屋（夜）

ピンク色で埋め尽くされた、派手な
ギャルっぽい部屋。

練習用のマネキンが並んでいる。

せいな、電話しながらネイルケアを
している。

せいな「めっちゃ嫌ってたでしょ？まああ
の頃のことといえば嫌われても当然だとは
思うけど」

のどかの声「その央地くんとLINE交換
させたのは清田さんでしょ」

せいな「あはは、まあね。高校時代の央地
は私から見てもデリカシーのない大バカ
だったけどさ。一応成長してるっぽく見
えたからちょっとお紹介したくなって。

ま、一番大事なのはもちろん横川さん自
身の気持ちだけだね」

○横川家・のどかの部屋（夜）

のどか、ワンピースを体に当てて鏡を見る。
のどか「ちよっと気が向いただけです。ク

「オスランド、私も行きたかったし」

せいなの声「ふうん。横川さんて、実はツンデレだったりする？」

のどか、微笑む。

のどか「さあ、どうでしょう」

○遊園地・全景

○同・敷地内

客が多くにぎわっている。

央地「早く早く！」

のどか「ちよ、ちよっと待ってくださいどこへ行くんですか!？」

○同・コーヒーカップ

コーヒーカップが回っている。

のどか「これ？」

央地「うん。行こう!ほら」

央地、のどかの手を取って入る。

アナウンス「それではコーヒーパーティー、

スタートです！」

音楽が鳴り、カップが回り始める。

のどか、楽しそうに見ている。

央地、真剣な表情で深呼吸。

央地「よし」

央地、ハンドルをギュッと握る。

思い切り回し始める央地。

央地「じゅう、じゅういち……！」

のどか「ちよ、ちよっと……！」

のどか、ハンドルにしがみついている。
る。

央地、回しながらのどかを見て笑顔。

○同・ジェットコースター

ジェットコースターが動いている。

両手をあげて楽しんでいる央地と悲

鳴を上げ続けているのどか。

のどか「無理！無理！もうやめてく！」

央地、隣ののどかを見て嬉しそうに
笑う。

○同・ジェットコースター乗り降り場

車両から飛び降りる央地。

髪も乱れ、ぐったりして動けないの
どか。

央地、のどかに手を差し出す。

のどか、央地を睨みつける。

央地、笑顔で手をのどかの前に突き
出す。

央地「どうぞ。お姫様」

のどか、眉をひそめて嫌そうな顔で
手を取る。

のどか「貸しにしておきます」

央地「気にしなくていいのに」

央地、のどかをコースターから降ろ
してやる。

のどか「頼りたくないんです」

央地「俺としては頼ってほしいのに」

のどか、そっぽを向く。

○同・ベンチ

のどかと央地が並んで座りドリンクを飲んでいる。

央地「髪、乱れちゃったね」

央地、のどかの髪を優しく撫でる。
のどか、大人しく撫でられていたが
ハッと気付いて慌てて距離を取る。

のどか「なっ何をするんですか！」

央地「あ、残念」

のどか、央地に背を向けて座り直し
ドリンクを飲む。

央地、笑顔でのどかの傍に移動する。

央地「誘いを受けてくれたってことはちよ
つとは脈ありって思ってもいいんだろ？」

のどか「無いです。ホントに」

央地「まだ俺のこと嫌い？」

央地、のどかの手を握ろうとする。
のどか、それを避けるように立ち上
がる。

のどか「正直、わからなくなってきました。

：でも、そう簡単に割り切れる話じゃないんです」

央地、のどかを見つめる。

のどか、目を逸らす。

のどか「お手洗い行ってきます」

のどか、走っていく。

走り去るのどかの背中をゆかりが遠

くから見ている。

央地を振り返り、のどかの後を追

かける。

○同・建物の前

のどか、ハンカチを鞆に仕舞いながら建物から出てくる。

のどか、空を見上げる。

曇っている。

ゆかりが近付く。

ゆかり「あの」

のどか「はい？」

のどか、振り返る。

ゆかり「俊哉と付き合ってるの？あんだ」

のどか、眉を顰める。

のどか「なんですか急に」

ゆかり「アタシ俊哉の元カノ」

のどか「はあ……。央地君と付き合うつもり

はないですから、よりを戻したかったら

ご自由にどうぞ。ずっとなれなれしく付

きまとわれてこっちは迷惑しているくら

いなので」

ゆかり「彼に言い寄られて迷惑してるって

言いたげね」

のどか「そうですけど？」

ゆかり、バカにしたように笑う。

ゆかり「俊哉ってばホントいい性格してる

わ」

のどか「どういう意味ですか？」

ゆかり「あいつが結構なパリピだって知っ

てるでしょ」

のどか「そうですね、あの身なりですし」

ゆかり「楽しいこと大好きでアタシもしよ

つちゆうあちこち一緒に行って遊んでたけどさ。

あいつはそういう遊びやすい女が好みなの。

どっちかっていうとアンタ正反対ね」

のどか「私もそう思います。だから迷惑してるんです」

ゆかり「わかんない？だから本当にアンタのこと好きになってるわけがないってこと」

ゆかり、意地悪な笑みを浮かべる。

ゆかり「前に小林と話してたの聞いたよ。

落とせるか落とせないかとか、賭けてたみたい。

あれアンタのことだったんじゃないの」

のどか、目を見開く。

ゆかり「アイツに好かれてるって勘違いしてるの可哀想だったから忠告しといてあげるわ」

ポツポツと雨が降り出す。

ゆかり、スマホを見る。

ゆかり「あ、いけない時間だ。じゃあね、
さっさと俊哉から離れた方がアンタのた
めよ」

ゆかり、手を振って走り去っていく。
のどかから見えないところで満足そ
うな笑みを浮かべる。
のどか、茫然と立っている。

○同・全景

雨足が強くなってくる。

○同・建物の前

雨が降っている。

小走りで建物に入っていく客たち。
央地、ジャケットで頭を守りながら
走ってくる。

辺りを見回してのどかを見つけた。
のどか、濡れたまま立ち尽くしてい
る。

央地「やっと見つけた」

央地、駆け寄る。

央地「何してたんだよ、遅いから探しに来たよ」

のどか、反応しない。

央地、のどかを覗き込む。

央地「横川さん？」

のどか、央地を見る。

央地「中入ろう。濡れるよ…もう結構濡れてるけど」

央地、のどかの手を引いて歩き出そうとする。

のどか、手を振り払う。

央地、驚いてのどかを見る。

のどか、泣きそうな顔で央地を睨みつけ央地を平手打ちする。

央地、茫然とのどかを見る。

のどか「さよなら」

のどか、走り去る。

央地「おい！」

央地、追いかけてようとするが建物に入ろうとする客に阻まれてすぐに追いかけられない。
のどかを見失い、焦って周囲を見回す。

○同・トイレ個室内

のどか、個室の壁にもたれてハンカチで髪や手を拭う。
ハンカチで拭った手の上にまた水滴が落ちる。
のどか、自分の頬に触れ、涙に気付く。
手で何度も涙を拭う。

○住宅街・バス停（夜）

バスが停まる。
ビニール傘を持ったのどかが降りてくる。
傘を差して歩き始めるのどか。

スマホを取り出す。

央地からの着信とメッセージでいっぱいの画面。

のどか、スマホを仕舞う。

○同・のどかの家の前（夜）

のどかが歩いてくる。

家の前、塀にもたれかかる央地の影がある。

影の正体は見えない。

のどか、足を止めて影をジッと見る。

のどか「えっ」

央地が立ち上がり外灯の下に立つ。

びしょ濡れの央地の姿が照らされる。

央地、ホツとした表情で微笑む。

央地「おかえり」

のどか「央地くん。なんでここに？」

のどか、傘を差しかけようとして止める。

足早に央地の前をすり抜けて玄関に

向かう。

央地、のどかの背中に話しかける。

央地 「なあ、俺何かしたか？」

のどか、ドアノブに手をかけたまま

止まる。

のどか 「自分の胸に聞いてみたらどうですか」

央地 「もう聞いたよ、でもわからないから来たんだ。お前と再会してからこっち、お前を傷つけるようなことはやってないつもりだ」

のどか 「傷つかないと思ってるんだったら人を馬鹿にしすぎですよ」

央地 「何の話だよ」

のどか 「元カノって人が教えてくれました。私を落とせるか賭けてるって。小林君と」

央地 「は？」

のどか 「さよなら。賭けはあなたの負けです」

のどか、傘を央地に投げつけて家の

中に入る。

鍵がかかる音。

央地、傘を見つめる。

○同・玄関（夜）

のどか、ドアにもたれて涙を流す。

足元、傘から滴る水たまりができて
いる。

○同・のどかの部屋（夜）

真っ暗な部屋。

ベッドの上にうつぶせで寝ているの

どか。

スマホが鳴る。

のどか、のそのそとスマホを取る。

のどか「もしもし…」

せいなの声「やっほー！おつかれい」

のどか「清田さん」

せいなの声「なになに、元気ないじゃん。

今日デートだったんでしょ？」

のどか「デートじゃないですから」

せいなの声「えー？ちよっと、家出てきて

よ。話聞かせてよ」

のどか「今からですか？」

のどか、スマホの画面を見る。

夜の10時。

せいなの声「夜はこれからっしょ。出てき

て！明日も休みなわけだしさ。ね？」

のどか、溜息。

○同・のどかの家の前（夜）

傘を持ったのどかが出てくる。

歩き出そうとして驚いて足を止める。

央地が傘を持って立っている。

のどか「なんで…」

央地、頭を下げる。

のどか、央地の後頭部を凝視する。

央地「ゆかりに話聞いた。あいつが、君に

ひどいこと言ったって」

のどか「別にひどいことじゃ…教えてくれ

ただけですし」

央地 「違う！教えたんじゃない、あんなの嘘なんだ。小林と賭けたりなんかしてない」

のどか 「どうだか。勝手に人の片想いをばらして笑ってた人ですから、賭けるくらい平気でやりそうじゃないですか、あなた達なら」

央地 「あの時のことはホントに悪かったって。俺は元々からかうつもりとかそんなんじゃないくて、ただ純粹に君が小林のことで好きなら協力できないかと思って」

のどか 「好きな相手の片想いを応援？そんなバカな話あります？百歩譲って当時から私を好きなのが本当なら、適当なこと言って私の片想いをぶち壊そうとしたんじゃないんですか？大成功でしたけどね！」

央地 「そんなつもりじゃなかったんだって！マジで俺バカだったから失敗しただけ

で、本気で君のことと思って：」

のどか「もういいです！昔のことまで掘り起こして、これ以上私のことからかわないで！」

のどか、うつむく。

央地「…ごめん。結局は俺の今までの行いが原因なんだよな。君に誤解させてしまったのも、傷つけたのも」

のどか、顔を覆う。

央地「どうしたら許してもらえるかな」
のどか、首を横に振る。

のどか「無理です。信じられないです」
央地「なんでもする」

のどか「その言葉がまず信じられない」
央地「本気だ」
のどか「だったら頭まるめてください。

そのオシヤレな髪を全部」

央地「わかった」

央地、鞆を降ろして中を探る。

のどか、顔を上げる。

央地、鞆からハサミを取り出し前髪を掴む。

のどか、驚いて止めようとする。

央地の前髪が切り落とされる。

地面に央地の前髪が散らばる。

のどか、茫然と央地を見る。

央地「バリカンとか今ないから、こうやって切るくらいしかできないけど。明日にはちゃんと丸めっから」

央地、もう一度髪を掴みハサミを入れようとする。

のどか、慌てて央地の手を掴み止める。

のどかと央地、見つめ合う。

央地「俺、本気で君のこと好きだから。信じてもらえるまでなんだってやるから」

のどか「：ホントに：ダラブチ：」

のどか、うつむく。

のどかのスマホが鳴る。

○マンション・せいなの部屋（夜）

鏡台の前に座った央地。

せいな、央地のケープを取る。

央地、ベリーショートの坊主頭にな
っている。

央地、鏡をマジマジと見る。

せいな「どうよコレ」

央地「すげえな…マジでまだ卵なん？」

せいな「そりゃ学生ですから」

せいな、ソファに座るのどかを振り
返る。

せいな「横川さん。この頭で許してくれな

い？大分バツサリやったしさ」

のどか、央地を見る。

央地、不安げにのどかを振り返る。

のどか「まあ…央地くんの覚悟と本気はよ
くわかりました」

央地、安堵の笑顔。

のどか「信じてみてもいいかなって…思
いました」

せいな「あんたも素直じゃないね〜！ やつぱりツンデレじゃん」

せいな、笑いながらケープを片付ける。

のどか「（せいなに）あの」

せいな「うん？」

のどか「（おさげをいじりながら）私にも

…なにか、いい髪型ないですか」

せいなと央地、顔を見合わせる。

せいな、笑顔。

せいな「もちろん。横川さんにピッタリの

髪型 オススメするよ！」

○マンション・央地の部屋・玄関

央地、郵便受けからハガキを取り出す。

内容を見て笑顔。

○同・リビング

ハガキを見ながら央地が入ってくる。

央地 「あいつよっぽど同窓会やりたかったんだなあ」

央地、ソファに座り猫を撫でているのどかにハガキを渡す。

のどか 「同窓会。清田さん、幹事ですか」

央地、のどかの隣に座る。

央地 「会う度に高校時代のこと話してたもんな、あいつ。この行動力は見習いたいわ」

のどか 「十分あなたも行動力あると思いますけど？」

のどか、央地にハガキを返す。

央地 「どうする？行くか？同窓会」

のどか 「会いたい人もいるけど、でもまだちよつと怖いかな」

央地 「小林にもまだ会ってないもんなあ」

央地、ペンを取り、ハガキの欠席に丸を付ける。

のどか 「行かないんですか」

央地 「君が行かないのに行かないよ。わざ

わざ同窓会で会わなくても連絡とってるやつらもいるし。他の奴には、俺たちの結婚式で会えば十分じゃね？」

のどか「まあ…そう言えばそうですね…」

のどか、ハッと気づく。

のどか「えっ」

のどか、央地を見る。

央地、のどかを見返して気付く。

央地「あっ」

のどか、赤面して顔を逸らす。

央地「あ、あの、だから…」

央地、姿勢を正してのどかを見る。

央地「結婚、してください」

のどか、央地を見返す。

央地「まだ指輪とか用意できてないんだけど、俺前からずっと考えてたから。だから、その…」

のどか、笑う。

のどか「相変わらず、そういうの下手ですね」

のどか、央地の手を握る。

央地、のどかを見つめる。

のどか「もうちょっとときめかせてくださ
いよ」

央地「ごめん…勉強する…」

のどか「もう、ダラブチ」

のどか、央地の肩に顔を埋める。

央地、のどかを抱きしめる。

了